

別れて後に

日が暮れる　　雑林^{はやし}も沈む　　ああ日が暮れる
私達の吹きも　　もう済んだ　　孤りになつた私のうしろで
ツグミが啼く　　ああその歌も悲しい　　その生命も呪はしい
影をます　　その暮藍の中へ

私もまたあの雑居寮へ　　遷^{かへ}らねばならんのだ

その共同の生活^{しぐさ}と謂へ

私にはもう堪らない　　取残されたこの椅子^{ベンチ}も
思へば共有の物なのだ　　ああ堪らない　　私は行かう
日が暮れる　　私は行かう　　残り少ない　　私の影　　影よ
その影のやうに　　私は闇の中へ　　沈んで行かう
何處までも（ああそれは不幸だらうか）しかし
私は構はない　　私は私を信じよう

（昭和十二年「山桜」八月号）